

「かんさい自然フェスタ2008」の講演プログラムについて

大阪市立自然史博物館 和田 岳

大阪市立自然史博物館 佐久間 大輔

Lecture & symposium programs in "Kansai Shizen Festa 2008": The aim and role in the whole event. Takeshi Wada and Daisuke Sakuma (*Osaka Museum of Natural History*)

2008年11月15日、16日の2日間、「かんさい自然フェスタ2008 楽しみ・伝え・まもる私たちの自然」は大阪市立自然史博物館を会場として関西自然保護機構、大阪自然史センター、大阪市立自然史博物館の主催のもと開催された。その趣旨および概要について以下に報告する。

このイベントは関西自然保護機構創立30周年記念イベントとして、「関西各地での自然保護上の課題に直面している皆さんと、これまでの事例・成果を共有し、科学的な評価をするとともに各地でのこれからの保全活動にフィードバックすること」（関西自然フェスタ2ndサーキュラーより）を目的として、関西自然保護機構運営委員会を中心に企画された。既存の学会やシンポジウムにはなかった市民レベルの広がりを持つ企画として、なおかつ保全のための科学的な分析や新知見を提供する機会として企画され、前者は多くの出展者の協力で、後者は主には会期中に開催されたシンポジウム・レクチャーを通じて実現することができたと考えている。

当日は悪天候にもかかわらず来場者は2日間で延べ10050名を数えた。そして様々な形で自然保護に関わる関西周辺の団体・機関また研究者グループ42団体のブース出展をいただき、ポスター発表

も31件と多くの方のご協力をいただいた。大学などにおける研究成果を地域の自然保護活動にいかすきっかけ、地域の自然保護活動の横のつながりを作り、広く一般に知ってもらう機会として新たな可能性を開くことができたように思う。

また、2日間の期間中に2時間枠のシンポジウムが4本、他に自然保護レクチャー、基調講演、受賞講演など、学会並みの講演プログラムが展開された。7プログラムでのべ623名の参加者があり、これも小規模学会並みの水準といえる。シンポジウムは運営委員が分担してコーディネーターとなり、さまざまな観点から関西の自然保護の現



図1. 会場風景.

状と展望に光を当てた。開催されたシンポジウムとコーディネーターは以下の通りである。

● 15日10:00~12:00

「大阪湾の自然再生をめざすネットワーク活動の方向性を考える」

コーディネーター：山西良平（大阪市立自然史博物館）

● 15日12:30~14:20

「シカが森を喰べ尽くすまえにー研究から保全への展開をさぐるー」

コーディネーター：前迫ゆり（大阪産業大学）

● 16日10:00~12:00

「自然保護運動に役立つ自然保護教育とは」

コーディネーター：布谷知夫（滋賀県立琵琶湖博物館）

● 16日12:30~13:50

「近畿地方における外来種問題への取り組み」

コーディネーター：村上興正（同志社大学）

これらのシンポジウムを受けて15日には基調講演として長谷川雅美氏（東邦大学）に「カエルのきもちを忘れない」と題した講演をしていたが、16日午後には総括的な意味合いを持つプログラムとして、自然保護レクチャーが開催された。このレクチャーは、生物学の論理だけではなく、開発の論理や行政への提案までを含めた現実的、かつ実現性のある提案をどのように作ればいいのかを考えることをテーマとし、以下の3名の方に講演していただいた。

自然保護レクチャー

開発から自然を守るにはー開発計画への予防と対策ー

● 「過去の開発、これからの開発」

中瀬 勲氏（兵庫県立人と自然の博物館・兵庫県立大学）

● 「何を守るべきなのか、どう自然とつきあうかー保全生物学の視点ー」

角野康郎氏（神戸大学）

● 「『郷土力』を培うために：交流と伝承」

森 誠一氏（岐阜経済大学）

いずれの講演・シンポジウムも充実度が高く、

講演だけで終わらせるのではなく、是非紙上を通じて、広く会員のみなさんに参考、引用そして議論していただきたい内容だと判断し、今回の特集とさせていただいた。今回の特集では「自然保護レクチャー」と、「シカの問題」と「自然保護教育」に関わる2つのシンポジウムを取り上げた。

自然保護レクチャーのうち、角野氏の講演についてはその主要部を本誌30巻2号の巻頭言として改めて執筆していただいているのであわせてご覧頂きたい。本誌特集には中瀬氏、森氏から寄稿していただいた。シンポジウム「自然保護に役立つ自然保護教育とは」では、今回の特集掲載論文の他に田口圭介氏（高槻公害問題研究会）から「身近な自然情報から始まる自然保護教育」という講演を頂いている。また、シンポジウム「シカが森を喰べ尽くすまえに」ではこの特集掲載の2題の他に立澤史郎氏（北海道大学文学研究科）「ニホンジカの生態と市民調査の役割」、高柳敦氏（京都大学農学研究科）「シカと自然保護地域」の2題の講演をいただいた。残念ながら今回の掲載に間に合わなかった論考も、次号に掲載予定である。なお、次号のシンポジウム特集Ⅱは、基調講演、シンポジウム「大阪湾の自然再生」および「外来種問題」などが掲載される予定である。

最後になるが、「かんさい自然フェスタ2008」が単なるお祭りではなく、広い裾野を持ちつつも学術的な知見に基づいた提言活動を行う関西自然保護機構の姿を示す機会とすることができたのは、シンポジウムなどの講演者のみならず、活発な質疑を通じて議論を形成した参加者のみなさんの貢献によるものである。

自然保護のアドバイザリーボディとしての関西自然保護機構の活動の一環として、さまざまな提言や連携を行うと同時に、今後ともこのような機会をつくっていかねばと考えている。